一室型住居の空間分節からみたベトナム・白タイ族の 伝統的住居の空間構成の研究

STUDY ON THE SPACE ORGANIZATION IN THE TRADITIONAL DWELLINGS OF WHITE THAI IN VIETNAM FROM VIEWPOINT OF THE SPACE DIVISION OF THE ONE-ROOM TYPE DWELLINGS

上 田 博 之*
Hiroyuki UEDA

The purpose of this paper is to clarify the space organization of dwellings of White THAI in Vietnam. This paper is based on field research carried out in 1993 and 1994.

This study clarified as follows: 1) The one-room type dwellings of the White THAI have a some low by living behavior. For instance, a position of a family altar and a sunken, a space of a couple. 2) The space of dwellings is changing by the tourism since the DOI-MOI.

Keywords: White THAI, One-room Type Dwellings, Living Behavior, Space Division, Vietnam
白タイ族, 一室型住居, 生活行為, 空間分節, ベトナム

1. はじめに

1.1. 研究の背景

本稿で考察の対象とする白タイ族は、中国、タイ、ラオス、ミャンマー、ベトナム、インドの6ヶ国にまたがり居住するタイ・カダイ語族に属するタイ系諸言語民族（以下、タイ語系民族）の一支族である。このタイ語系民族の生活は文化人類学者などの関心をひき、中国雲南省のダイ族の生活と我々日本人の生活との深い関係などが指摘（註1）されたり、建築分野においても中国雲南省のダイ族を中心に多くの紹介や研究がなされている。その一方、中国以外の地域に居住するタイ語系民族に関する研究は少なく、特にベトナムのタイ語系民族に関する研究は、自然条件・地理的条件や政治的不安定などが調査研究を阻んできたため、ほとんど見られないと言ってよい。しかし、ベトナムのタイ族は、フランスによる占領を受ける以前から姓を有していること、現在、アニミズムのカミ観念が根強く、もともと仏教信仰はなかったと考えられることなど、一般に言われる伝統的意味でのタイ族と明らかにことなる特徴を持っている事からも興味深く、この地域のタイ語系民族住居の空間構成の解明は、他地域のタイ語系民族や、ベトナムの少数民族の住居の空間構成の解明に寄与するものと考えられる。

1.2. 研究の目的

本研究ではベトナムのタイ族の一支族である白タイ族（註2）をとりあげ、その住居の空間構成を分析・考察する。

白タイ族は、一室型住居（本稿では、主たる居住空間が一室空間である住居をこう呼ぶ）で居住しているが、その空間の各部がそれぞれ異なる意味を有すると考えられる。そこで本研究では、白タイ族の住居の住まい方を分析し、白タイ族の伝統的住居における、生活行為と空間各部の対応関係を明らかにするとともに、住居の空間構成の特徴を指摘する事を目的とする。

2. 調査の概要

2.1. 調査の方法

調査対象とした集落は、ベトナム・ホアビン（Hoa Bin）省マイチャウ（Mai Chau, タイ語では Muong Mun: ムン村の意）のラックターイ（Lac Thai）村（図1）で、ハノイから西南に約100kmに位置する。この地域は、タイ族が集中して居住する地域の東南端にあたる。ハノイから比較的距離にあるにもかかわらず、険峻な山々に囲まれているなど、自然・地理条件が都市・平野部との交渉を困難にしており、そのことがマイチャウの白タイ族独自の生活文化や社会形態の伝承に深くかかわっていると考えられる。

本論文は1994年に日本建築学会大会学術講演梗概集、1995年近畿支部研究報告集に発表したものをもとに加筆、修正したものである。

* 大阪市立大学生活科学部生活環境学科 助手・修士(工学)

Research Assoc., Dept. of Environmental Design, Faculty of Human Life Science, Osaka City Univ., M. Eng.

図1 調査対象地とタイ族の居住域

調査対象の選定に先立ち、予備調査としてホアビン省の白タイ族の集落の観察調査及び抜取調査を行ったが、本集落は伝統的な茅葺き高床式住居が継承された集落であるといえる。

調査項目は、集落の実測、住居の平面・断面・立面の採取、および居住者・村長・生産合作社役員に対する、家族構成・住まい方などのヒアリング・観察を行うというものであった。

調査は、1993年8月～9月（註3）および1994年7月（註4）に行った。

2.2. 調査対象住居の選定

ラックタイ村は86の世帯からなっており、生産合作社の単位（ドイという。註5）で3つに分けられ、ドイ1は25世帯（20住宅）、ドイ2は31世帯（28住宅）、ドイ3は30世帯（29住宅）となっている。同一半族（註6、この村は元来単一族であると考えられるが、以下に記す世帯の拡大に伴い現在はHa VanとHa Congという姓をもつ2つの集団とそれ以外の姓の集団がある）ごとに住み分けている。

調査対象住居の選定にあたり、観察調査および抜取調査を行った結果、ドイ2に伝統的住居が多いことがわかった。

また、この村は1945年以前は現在のドイ2の位置に21戸（1氏族）で構成されており（図2、図3）、世帯数の拡大と居住域の拡大が、2段階でおこっている。第1段階は分家による拡大でドイ3の部分ができ、第2段階は首長制の崩壊による家内奴隷の独立、およびその後の流入者による拡大でドイ1ができています。

以上のようにドイ2には現在も伝統的な住居が多く、この土地に永く居住し、本家に当たる者が多いことから調査対象をドイ2とすることにし、詳細調査を12戸（表1）について行った。

2.3. 住宅の概要

ドイ2の各住居の敷地は道路に面し短冊状にあり、道路に面した部分には、建築用材になる樹木やバームツリーなどが植えられる。敷地内に食用の淡水魚を飼うための池があり、住宅の後方には、バナ

表1 ドイ2の住宅と調査数

		ドイ2（内、詳細調査実施住宅）		計
		付属屋なし	付属屋あり	
伝統的住宅	5スパンの住宅	1（1）	0	1（1）
	4スパンの住宅	10（4）	7（3）	17（7）
	3スパンの住宅	6（3）	4（1）	10（4）
非伝統的住宅		0	0	0
合計		17（8）	11（4）	28（12）

図2 ラックタイ村集落図

図3 ラックタイ村旧住居域中心部

ナなどの果樹や野菜が植えられる菜園がある。

住宅は2 m程度の床高の木造・葺きの高床式住宅である。1950年代までマイチャウは首長制（フィアオ制）がしかれており、当時の記録（ムオン規則、註7）によれば、家とそれを取り囲む垣根には身分の上下によって様式が定められており、住宅には台所、階段、囲炉裏があったことがわかるが、これらの様式および身分による差については不明である。現在は垣根はなく、敷地面積・住宅の規模、建築材料以外に身分差を感じとるものはない。

住居は元来1棟建てであったが、現在では主たる居住空間である主屋とトイレ・調理場の付属屋で構成されているものもある。間口8m前後、奥行12m前後の主屋は空間が分節されておらず、簡単な衝立により分けられることはあるが、一室空間である。この居住空間は桁行方向3～5スパン（表1）、梁間方向1スパンである。

このような高床式住宅で平均4人（最大6人程度）が生活する。子供は婚姻と同時に住宅を建設し独立する。

近年、ラック村は観光客が盛んに押し寄せ、収入増や資本主義価値観の移入、物質文化が浸透しつつある。観光客の増加に伴い、傷み・手入れが少ない瓦葺き屋根に変え、居住空間にあった囲炉裏は熱さをさけて付属屋に移されつつあり、個々の住宅で簡易シャワーを備えるなど、近代化も激しい。第一回調査と第二回調査の1年間に瓦葺き屋根の住宅が増え、住宅内から囲炉裏がなくなった家もいくつか見られた。送電され、テレビ・扇風機・冷蔵庫などの電化製品を保有する裕福な家族が出現した。

住宅の建設は、村の占い師のアドバイスにより日程を決め着工される。家族が、建築材料を敷地と別の場所（木材の伐採地）で部材寸法

にカットする。建築初日と最終日は8人程度の村民の手をかり、あとは家族で建設する。他の村の親戚、大工が建設することはほとんどない。16日程度で主体構造の工事は終わる。修理はほぼ毎年行われるが、だいたい10年で屋根の葺き替えがなされ、20年前後で新築される。

3. 住居の空間構成の分析

住まい方の実態および白ターイ族の住居の空間構成について明らかにするため、モノグラフィーとして、4スパンおよび3スパン、5スパンの住居の事例について、プランと住まい方を明らかにし、住居の空間構成の特徴を述べる。

事例1 4スパンの住居（付属屋あり、図4）

この世帯は現在の主人が1993年まで10年ほど村長をつとめていることから、首長制時代の貴族階級もしくは、それに準じる階級に属していたと考えられ、現在も裕福な世帯である。家族は、主人夫婦（主人68歳、妻68歳）と孫（女20歳、男18歳）である。田の管理の問題から孫と同居している。

この住居は現在、主たる居住空間である主屋と台所・トイレからなる付属屋で構成されている。1993年の調査時点ではこの付属屋は、屋根はあるが、粗末な壁しかなく吹きさらし同然であった。1974年にこの住宅を建てたときには、この付属屋はなく、10年くらい前に増築したということである。1994年の時点ではこの付属屋は建て替えられ面積は大きくなり、屋根は瓦葺き板壁を持つものとなっており、いろいろがつくられていた。この改築理由として、いろいろにより夏場の住居内

図4 事例1住宅平面図

の温度上昇が大きく住みづらいこと、観光・宿泊客のための、宿泊のスペースと独立した炊事空間の必要性があげられている。

1993年時点の住まい方と1994年の住まい方を比較しながら見てきたい。

この一室空間を、梁行方向のスパンおよび梁間方向中央で2分し、それぞれの空間（図4のA、B、C、D、E、F、G、H）についてその使い方をしてみる（事例2～5も同様に空間を分ける。）。

まず、入り口はAの位置にある。A、Bは接客空間としてござが敷かれ座卓が置かれている。日中主人はこの座卓に入り口に向かって座っていることが多い（田での作業は暑気をさけ、早朝、夕方に行く）。村長をしていたこともあろうが、接客空間として他の家以上にしつらえられている。A空間には1974年建設当時から1980年代半ばまでいろいろがあった。このいろいろは調理用ではなく来客者に茶をもてなすためのものであった。Bの壁側は主人の昼寝のスペースとして厚さ10cm程度の板が敷かれている。この就寝場所は夜間孫（男）の就寝空間として利用されることもある。Cの空間には機織りが置かれており、妻や孫（女）の作業空間となっている。Dには、先祖をまつる祭壇に類する家具（図5、以下祭壇とする）が置かれている。この祭壇は唯一家具らしい家具である。Eは1993年までいろいろがあり、調理の空間となっていた。当時の付属屋にはいろいろはなく、水をつかうものや火をとおさない調理のみ行っていた。1994年時点でEにいろいろはあるが、上にベッドが置かれ、火をくべることはない。このベッドは当初来客（観光客）の寝場所であったが、しばらく後には孫（男）も寝るようになっていく。Fは孫（女）の就寝場所である。現在Fで食卓をとるが、Eで調理をしていた時も食卓はFでとられていた。Gの空間は付属屋の通路になっており、ほかは家財置き場として使用されているにすぎない。FとHは高さ1800mm壁（簾立程度のものであり、以下簾立とする）で仕切られ、Hは主人夫婦の就寝空間、家財・食料置き場となっている。

付属屋の台所・トイレの配置は1993年時点と1994年のものでは規模が大きくなり、いろいろが置かれた以外変わっていない。

図5 祭壇

事例2 4スパンの住居（図6-1）

家族は主人55歳とその妻48歳、長男22歳、次男20歳、長女16歳の5人である。

空間の使い方は、AおよびBは接客空間として利用されるほか、主人の日中の居場所となっている。住居はこの地域で一番多いプランで桁行方向4スパンの一室空間で付属屋はない。Cは長男と次男の就寝空間である。Dには祭壇が置かれており、このDの空間は先祖の空間

であるとされている。Eにはいろいろがあり、調理空間となっているが、家族がそろって採る食事はFの空間で行われる。Fの空間は長女の就寝場所にもなっている。FとHは簾立によって仕切られており、Hの空間に主人夫婦が就寝する。Gは別段用途が限定されている訳ではないが、家財・食料などが置かれている。

トイレは住居内になく、近所ですませているというが、築落内にトイレはなく、場所は不明である。

事例3 4スパンの住居（2世帯3世代同居、図6-2）

家族は主人57歳とその妻47歳、長男夫婦と孫（長男24歳、妻22歳、孫女1歳）の5人である。家族構成はラックタイ村ではめずらしく、2世帯同居である。最近では、結婚して間のない息子夫婦が同居する例は増えつつある。

空間の使い方は、AおよびBは接客空間として利用されるほか、主人の日中の居場所となっているが、B空間のDよりのところに祭壇がある。祭壇の前では眠ってはいけないとの言い伝えから、就寝場所を確保するため祭壇をDからBに移したが、できるだけDよりにおいているとのことである。この祭壇はこの住居では唯一の家具である。このA、B空間は就寝場所としては用いられていない。Eにはいろいろがあり調理空間となっているが、その回りで食卓をとるのは女性が簡単にとるとき以外になく、Cが主たる食卓空間であると思われる。Dの空間は、夜間主人夫婦が就寝しており、主人が祭壇の側になるようにして寝ている。主人夫婦は長男の結婚前までHの空間に寝ていた。長男は結婚前はFに寝ていたようである。F、Gの空間は現在これといった利用はされていない。Hは簾立によって区切られており、現在長男夫婦と孫が就寝しているほか、家財の置き場となっている。

事例4 5スパンの住居（図6-3）

居住者は、主人65歳、その妻63歳、長男夫婦（夫40歳、妻38歳）、孫（女16歳、男15歳）の6人である。先に述べたように2世帯同居はラックタイ村ではめずらしい上、このように長期に渡る同居はほとんどない。

この住居は1984年に建設されている。建替え理由は老朽化と家族が増加（当時は次男、三男が同居していた）狭くなったことによる。

現在の住まい方を見てみると、A、Bは接客および日中の主人の居場所となっている。C、Dは先祖の空間とされ、Dに祭壇がある。建設当時はCに次男・三男が就寝していた。Eには機織りが置かれ、孫（女）の就寝空間となっており、Fは孫（男）の就寝空間である。Gにいろいろが置かれ、調理がなされるが、食卓をとることはほとんどない。Hは家族の食事空間であるとともに主人夫婦の就寝空間でもある。Iは家財・食料置き場となっているが、家具はない。JはHとの間に簾立があり、長男夫婦の就寝空間である。トイレは住居内に無い。

事例5 3スパンの住居（図6-4）

この住居には主人42歳と妻37歳と、その子（女18、男16）の4人が住んでいる。

結婚と同時に分家し、住居を建設している。本家は同じくドイ2にある。住居が3スパンと小さいのは、土地が無かったこと、金銭的余裕が無かったことによる。建て直しに際しては規模を大きくしたいが、この敷地では難しい。

その住まい方を見ると、A、Bが接客空間で、主人は日中この空間にいることが多い。Bには息子が寝ている。Cにはいろりがあり、調理空間であるが、食事はDでとられることが多い。Dはまた娘の就寝空間でもある。Eは家財・食料の保存場所であるが、家具はない。Fで主人夫婦が就寝している。

この住居には祭壇はない。分家でありまだ死者が出ていないことから不必要であるとのことである。

このように3スパンの住居には分家の住居が多く、祭壇がないものが一般的である。祭壇をもつものもあるが、その数は少ない（ドイ2では2例）。祭壇のある住居を事例を以下に示す。

事例6 3スパンの住居（図6-5）

この事例では、主人（71歳）と長男夫婦（夫37歳、妻36歳）、孫（男12歳、女7歳）が居住している。

図6-1 4スパンの住居・平面図

図6-2 4スパンの住居・平面図

図6-3 5スパンの住居・平面図

図6-4 3スパンの住居・平面図

図6-5 3スパンの住居・平面図

Aは接客空間として使われ他の事例同様、日中は主人の居場所となっている。B空間は祭壇がおかれ先祖の空間である。C空間とE空間の間にいろりがあり、いろりのまわりで食事が行われるが、祭壇側には主人が座る。D空間は主人と孫（男）の就寝空間となっている。FはD空間との間が衝立で仕切られており、長男夫婦と孫（女）が就寝している。

4. 結論

ラックターイ村の住居は、上記の事例とほとんど同様の住まい方が見られ、以下のことが言える。

3スパンの住居は、分家や新住民の所有のものが多く、祭壇があるものが少なく、衝立で仕切ることも少ない。家族が拡大し、死者が出る頃に住居を建て替え、可能な限り、4スパンの住居を建てる。